



夫は第4回目の抗がん剤治療を終えて12月14日に、3度目の一時退院することが出来ました。

退院の帰り支度を終えた直後、貧血で失神し、急遽再入院。CT検査を受け、血小板輸血を受けて、無事を確認してもらい、予定日の翌日の退院でした。夫は体力のなさに驚いていますが、合計111日にも及ぶ入院で、筋力も衰え、歩くのも苦しいようです。帰宅後、入浴の介助をして、見ると、夫はアウシュビッツの救助されたユダヤ人男性のような面影で、体が曲がり、やせ衰えた、弱々しい姿になっていて、胸が痛みます。

主治医は「祈る思いで始めた非常に厳しい抗がん剤治療」の効果が出て、がん細胞が死滅してきていることを喜んでおられました。現在は、副作用による体力低下が夫には厳しい状態を強いているのです。血液のダメージにより、全身的に苦しいようです。たくさんの抗がん剤を用いています。一度、抗がん剤が血管以外で漏れているのを見つけてもらい、すぐに処置してもらいました。その箇所が壊死する劇薬とのことです。看護師は防護して、投与作業をしています。妹も治療中、針と接続部分が緩んで抗がん剤が漏れるアクシデントがあり、肌着、パジャマ、掛布団は厳重にビニール袋に入れて、廃棄処分にし、部屋には医師、看護師が集まり、マニュアルに沿って、消毒、解毒作業したとのこと。慎重な扱いが必要な製剤です。

投与中の抗がん剤	効能	副作用 (夫に発症したもの)
エトポシド (96時間点滴)	DNAを切断した後、酵素と複合体を形成し、DNAの再結合を阻害する。	骨髄抑制(汎血球減少、白血球減少、好中球減少、血小板減少、出血、貧血等)、ショック、アナフィラキシー、間質性肺炎等。
ドキソルビシン (96時間点滴)	抗腫瘍性抗生物質である。	心筋障害、心不全、骨髄抑制、出血、心電図異常、頻脈、食欲不振、悪心・嘔吐、口内炎、下痢、脱毛、発熱等。
ビンクリスチン (96時間点滴)	微小管の重合反応を阻害する事により、細胞の有糸分裂を阻害する。	骨髄抑制(汎血球減少、白血球減少、血小板減少、貧血)、粘膜障害、脱毛のほか、末梢神経障害(神経麻痺、筋麻痺、痙攣等)。
プレドニゾン (点滴注射)	ステロイド系抗炎症薬で、炎症抑制作用だけでなくリンパ球を破壊するので悪性リンパ腫では不可欠。	ショック、アナフィラキシー、誘発感染症、感染症増悪、続発性副腎皮質機能不全、糖尿病、消化管潰瘍、消化管穿孔、消化管出血、膀胱炎、精神変調、うつ状態、痙攣等。
シクロホスファミド (点滴注射)	DNA合成を阻害し、抗体産生中のBリンパ球の増殖を妨げる。	ショック、アナフィラキシー様症状、骨髄抑制、出血性膀胱炎、排尿障害等。
リツキシマブ (点滴注射)	分子標的治療薬のひとつとして抗がん剤・免疫抑制剤などとして使用されている。	初回投与時に発熱や悪寒、かゆみなどのアレルギー症状が現れることがある。その多くは軽い症状で、予防・治療が可能。骨髄抑制や心臓障害、間質性肺炎、腎不全、脳神経障害等。